



行きたい!
会いたい!

まちライブラリー

≡ 全国47の人と本と街 ≡

磯井純充 編著 / まちライブラリー応援隊 著



まえがき

本書は、全国に点在する「一度は行ってみたい」「この人に会ってみたい」と思えるまちライブラリーを選び、紹介する一冊です。

ここに登場するのは、有名な施設や話題性の高い場所ばかりではありません。むしろ、少し気をつけて歩かなければ見過ごしてしまいそうな場所や、看板も控えめで、初めて訪れるには少し勇気のいるようなところが多く含まれています。しかし、そうした場所にこそ、人の思いや時間の積み重ねが、静かに息づいています。

2011年に活動が始まって以来、まちライブラリーは制度や組織に縛られることなく、人から人へと伝わりながら広がってきました。誰かが大きな計画を立て、全国展開を目指したわけではありません。目の前の人との関係の中で、「ここに本があつたらいいな」「誰かと共有できたら面白いな」というささやかな思いつきが形になり、それが次の人へと手渡されてきました。その結果、15年の歳月の中で、およそ1300カ所にまで広がっています。

本書では、その中から47カ所を選び41節にまとめました。本来であれば、もっと多くの場所を紹介したいという思いがあります。どのまちライブラリーにも語るべき物語があり、甲乙つけがたい存在です。しかし紙幅の都合上、今回はこの数に絞らざるを得ませんでした。本書に掲載されていない場所にも、同じように魅力的な活動が続いていることをご理解いただければ幸いです。

そもそも、まちライブラリーは制度的でも組織的でもない活動です。誰かが設計図を描いて配置したのではなく、個々人の体験や思い、偶然の出会いを通して、いわば伝承のように広がってきました。そのため、場所に偏りが生まれたり、広がる速度に差が出たりすることもあります。

しかしそれは欠点ではなく、むしろ本質です。効率や均質性を優先していないからこそ、それぞれの土地、それぞれの人の人生が、そのまま場の中にじみ出ます。まちライブラリーは完成された仕組みではありません。完成を目指しているわけでもない、と言ったほうが正確かもしれません。常に試行錯誤の途中にあり、関わる人の変化とともに姿を変え続ける、動きのある存在なのです。

かつて私は、六本木ヒルズを手がけた森ビルに身を置いていました。当時は、知恵を尽くし、力を蓄え、何かを成し遂げることに全力を注いでいました。大きなプロジェクトに関わり、多くの人々の注目を集める仕事を経験できたことは、かけがえのない財産です。一方で、規模が大きくなるほど、反感や誤解が生まれやすくなることも実感しました。つくり上げたものの中には、長く続かなかつたものも少なくありません。

収益を柱にした活動は、収益が立たなくなれば消えていきます。ブランドや価値創造を目的とした活動も、異なる価値観のもとでは、ときに受け入れられない存在になります。また、制度に依存した活動は、制度が時代とずれた瞬間に、形だけが残り、意味を失ってしまうことがあります。

そうした課題に、別の角度から向き合おうとしているのが、まちライブラリーです。前著『まちライブラリー』の研究「個」が主役になれる社会的資本づくり」（みすず書房）では、「個」が

主役になる社会というテーマのもと、その可能性に触れました。本書は、その考えを一步進め、具体的な場所や人の姿として提示する試みでもあります。

本書は、どこからでもお読みいただけます。気の向くままページを開いて、ご関心のある地域やテーマから読み進めても構いません。もちろん、最初から通して読んでいただければ、まちライブラリーの輪郭や広がりや、より立体的に感じていただけるでしょう。

第1章では、「小さな一歩がまちを変える」をテーマに掲げました。どの事例も、ごく小さな行動から始まっています。本棚を置く、扉を少し開く――その一歩が、やがて周囲を巻き込み、地域や行政を動かす力へとつながっていきます。

第2章は、「子ども達を包み込む第二の居場所」です。家庭でも学校でもない居場所が、子どもたちにとってどれほど大切かを教えてくれる事例を集めました。行動範囲が限られる子どもたちこそ、身近で、無料で、ありのままを受け止めてくれる場所が必要であることに気づかれます。

第3章は、「異空間を舞台にするまちライブラリー」。思わず「こんなところか？」と驚くような場所所で始まった活動を紹介します。その背景には、人の創造力の豊かさや、それぞれにとっての必然があります。

第4章は、「大規模施設との共生から生まれるまちライブラリー」です。ここで紹介する6カ所は、私が代表を務める一般社団法人まちライブラリーが運営に関わっています。行政や企業と対話を重ねながら生まれたこれらの場合は、利用者にとって欠かせない存在となり、生き方を前向きに捉える

きっかけにもなっています。

第5章は、「人が人を呼ぶまちライブラリー」。特別な肩書きではなく、それぞれの問いや違和感から行動を起こした人たちが登場します。本や場所以上に、「人」の存在そのものが場の空気をつくり、関係を育んでいきます。

第6章は、「テーマが光るまちライブラリー」。運営者の関心や情熱が、そのまま棚に表れています。好きなものに深く向き合う姿勢が、場を生き生きとさせています。

第7章は、「愛読家を魅了するまちライブラリー」。選り抜かれた蔵書と空間には、読書の履歴と人生がにじみ出ています。本と真剣に向き合ってきた人の姿勢に触れる章です。

最後の付録パートでは、新聞記者として長年まちライブラリーを見つめてきた宮内禎一氏が私へのインタビューを通して、15年の歩みを問いなおしてくれています。あわせて、データやQ&Aも収録しました。

また本書は、私を含め全国のまちライブラリーのスタッフが分担して執筆しています。それぞれの視点の違いも、あわせてお楽しみください。

どうぞ肩の力を抜いて、気軽に本書を手にとってください。そして読み終えたあと、少し外へ出てみたくなったり、誰かと話してみたくなったりしたら――それは、まちライブラリーが、すでにあなたの中で動き始めている証なのだと思います。



まえがき

002

第1章 小さな一歩がまちを変える

第1節

012

まちライブラリー@ぎよさん文庫&

吾鳥絵はるさん(島根・石見銀山)

石見銀山まちを楽しくするライブラリー(島根・石見銀山)

まちライブラリーカフェ pukapuka(島根・温泉津)

はらっぱ図書室(島根・三瓶山)

第2節

016

まちライブラリーはちらぼ(秋田・八郎潟)

さんしゅう(秋田・八郎潟)

第3節

020

まちライブラリー@ちとせ(北海道・千歳)

第4節

024

まちライブラリー@ MOYA Kaneyama(山形・金山)

第5節

028

まちライブラリーとかとか(大阪・枚方)

第6節

032

まちライブラリーはれくも(山形・鶴岡)

コラム 一人の小さな揺らぎ

036

第2章 子ども達を包み込む

第三の居場所

第1節

038

まちライブラリー@キッズラップ

子ども第三の居場所山口宇部拠点(山口・宇部)

第2節

042

a little space(北海道・札幌)

第3節

046

絵本とこどもの本の図書館ぎおんぼう

(広島・安佐南区)

第4節

050

子供図書館(長野・池田)

第5節

054

まちライブラリー

@ JimoKids 石蔵秘密基地(東京・北区)

コラム 息抜きできる場

058

第3章 異空間を舞台にする

まちライブラリー

第1節

060

いくP.Aの図書室〜ふくろうの森〜(大阪・生野区)

第4章

大規模施設との共生から 生まれるまちライブラリー

第1節

082

まちライブラリー@もりのみやキューズモール
(大阪・中央区)

第2節

086

第2節

064

念々堂(大阪・住吉区)

第3節

068

いのちのきらめきライブラリー(北海道・札幌)

第4節

072

まちライブラリー@蔵の図書館(千葉・四街道)

第5節

076

まちライブラリー@東大阪市文化創造館(大阪・東大阪)

コラム 人の知恵の社会的広がり

080

まちライブラリー@MUFFGPARK
(東京・西東京)

第3節 090

まちライブラリー@南町田グランベリーパーク
(東京・町田)

第4節 094

まちライブラリー@ゆめタウン宇部(山口・宇部)

第5節 098

まちライブラリー@履正社十三図書館(大阪・淀川区)

第6節 102

まちライブラリー@アクロスプラザ北柏(千葉・柏)

コラム ミクロに対応すると生まれる幸せ 106

第5章

人が人を呼ぶ
まちライブラリー

第1節 108

まちライブラリー北勝堂(大阪・北区)

第6章

テーマが光る
まちライブラリー

第1節 138

本のある喫茶店うのん(奈良・薬師寺)

第2節 142

ガレージ文庫横須賀西(神奈川・横須賀)

第3節 146

シネマライブラリーEnd Mark(大阪・住吉区)

第4節 150

心音Books(愛知・名古屋)

第5節 154

まちライブラリー@ひびうた文庫(三重・津)

第6節 158

こしょカフェとなみ富山まちライブラリー(富山・砺波)

コラム 配架された本の持つ力 162

第2節 112

あひる図書館(静岡・三島)

第3節 116

まちライブラリー@みなとじま(兵庫・神戸)

第4節 120

まちライブラリー@イーラボ(富山・小矢部)

第5節 124

まちライブラリー@ブックハウスカフェ
(東京・神保町)

第6節 128

ふりーすべーす「かんまんよ」(愛媛・西予)

第7節 132

つむぎライブラリー(北海道・千歳)

コラム 心の扉と人の磁力 136

第7章

愛読家を魅了する
まちライブラリー

第1節 164

荻原記念文庫 La Microbiblioteca de BABEL
(長野・箕輪)

第2節 168

まちライブラリー@奥多摩ブックフィールド
(東京・奥多摩)

まちライブラリー@本のふるさと奥多摩(東京・奥多摩)

第3節 172

Ne. Co. / みどりの図書館(長野・須坂)



第4節

姫路城下町 町衆のライブラリー（兵庫・姫路）

176

第5節

ともしび文庫（アメリカ・シアトル）

180

第6節

みずず Library & Bar（藝科親湯温泉）（長野・茅野）

184

コラム

本が届ける人の気持ち

188

付録

振り返りインタビュー（宮内禎一×磯井純充）

190

データで見るまちライブラリー

200

まちライブラリーの始め方Q&A

203

読者のみなさんへ（あとがき）

208

執筆者紹介

211



小さな想いを詰め込んだ「りんご箱」が、
まち中に広がる北海道・千歳



市民の居場所として復活した「まちライブラリー@ちとせ」

7月議会において、再開に向けた予算が成立しました。議会の傍聴席には、地元高校生38人が詰めかけ、人

口約9万7000人のまちにとって象徴的な一日となりました。こうした経緯を経て、2022年

2 020年12月末、北海道千歳市にあった旧「まちライブラリー@千歳タウンプラザ」は、惜しまれつつ閉館しました。2016年12月の開館以来、年間約7万人が訪れる市民の拠り所でしたが、オーナー企業がコロナ禍による業績悪化を受け、やむなく閉館を決断したのです。

この決定に対し、再開を願う声が千歳市内に広がりました。市民有志によって2200人を超える署名が集められ、市役所や市議会へと届けられました。その結果、2021年

の正月明け早々、市長や多くの市議会議員が参列するなかで、新「まちライブラリー@ちとせ」は再び扉を開きました。開館式典で市長がテーパーカットを行うすぐそばで、静かに自習に励んでいる高校生たち。この場所が彼らにとって再び「居場所として戻ってきた」ことを物語る印象的な光景でした。

千歳市の中心部には、「グリーンベルト」と呼ばれる公園道路があります。長年、市民に親しまれてきたこの場所では、夏になるとビール祭りや航空祭と連動したイベントが開かれ、まちの人々の記憶と日常をつないできました。

2022年からは、このグリーンベルトを舞台に「ちとせまちライブラリーブックフェスタ」を開催。「本

のまちちとせ」を合言葉に、古本市や読書をテーマにした市民参加型の催しが広がっていきました。

翌2023年、さらに本を身近に感じてもらうと始まったのが、りんご箱を使った展示でした。思い思いの本やクラフト作品を一箱に詰め込み、それぞれの人が「自分の想いを表現できる場をつくったのです。」

りんご箱を使うことになったきっかけは、私の何気ないひと言でした。「安く手に入る木箱を並べて、本のまちちとせ」をアピールできればいいね。」

するとスタッフの根本幸枝さんが、「公設市場なら200箱くらい提供してくれるかもしれません」と応えてくれました。

根本さんは、幼稚園教諭として働



ブックフェスタにて、グリーンベルトでハンドメイドグッズを販売するサポーターたち



十箱十色のりんご箱で彩られる館内

してくれました。参加の理由は、「子どもと一緒に地域のことに関わってみたかったから」。りんご箱は、日常から少し離れた「家族の小さな非日常」を生み出していました。

先述のりんご箱を提供してくれた根本さんは、現在「フードバンク千歳すまいるはーと」を仲間とともに運営しています。専用の部屋を借り、ひとり親家庭とその子どもたち

いた経験を持ち、フードバンクの活動でも中心的な役割を担ってきた方です。ひとり親家庭に食材を届ける活動を通して市場とのつながりが生まれ、その縁が、りんご箱へとつながりました。まちの中の別々の活動が、静かにつながった瞬間でした。

また、この3年間で、毎年りんご箱プロジェクトに参加しているのが、「秋桜文庫」を運営する山城桜さんです。自宅の車庫にりんご箱を置き、家族で読んだ本を紹介する小さなまちライブラリーを続けています。

初年度は試行錯誤の連続だったのですが、3年目となる今年（2025年）は、道行く人が思わず足を止め、手に取ってくれる本を意識して展示したといいます。「自分の好き」だけでなく、「誰かの心

を支えるため、月に一度の子ども食堂や、週に一度の個別相談を続けています。

「ご自身も父親に育てられた経験から、同じ境遇にある子どもたちの気持ちがよく分かると語ります。もちろん、この場所にも根本さんたちの「りんご箱」が置かれています。

2025年のブックフェスタでは、125箱のりんご箱がグリーンベルトに並び、多くの市民グループが参加しました。展示を終えたりんご箱の多くは、それぞれの家庭や活動拠点へ戻り、「まちライブラリー」として登録されています。一部は「まちライブラリー@ちとせ」で常設展示され、訪れる人を迎え続けています。

一箱一箱に詰め込まれているの

に届く本」を考えるようになった。その言葉が印象的でした。

小学生の兄妹と母親の3人で参加した黄田さん一家の姿も、来場者の目を引きました。4年生の兄・蒼くんは夏休みの自由研究を、2年生の妹・雫さんは折り紙作品を展示。お母さんは2人の作品づくりを手伝いながら、「家族で一緒に何かをつくる時間がうれしいです」と笑顔で話



「ちとせまちライブラリーブックフェスタ」の様子



自作の本を展示するイベント「本屋で買えない本屋さん」

は、本だけではなく、持ち主の世界観や暮らし、そして小さな想いです。その力は決して大きくはないけれど、まちのあちこちに広がり、やがて点が線となり、面となっていく。

「千歳といえば本のまち」「千歳といえばりんご箱のまち」——そんな呼び名が自然に生まれる日も、そう遠くないのかもしれない。

磯井純充記

まちライブラリー@ちとせ

登録No. 1914

住所 〒066-0027 北海道千歳市末広
6-3 アルファ千歳ビル1階(JR千歳駅東口側ロータリー横)

連絡先 0123-21-8530

ホームページ <https://machi-library.org/where/detail/2437/>

執筆者紹介

磯井 純充（いそい よしみ）

まちライブラリー提唱者

1958年大阪市生まれ。中央大学文学部哲学科卒。大阪府立大学大学院経済学研究科博士後課程修了。経済学博士。1981年、森ビル株式会社に入社し「アーク都市塾」「六本木アカデミーヒルズ」などの文化・教育事業に従事。取締役広報室長などを歴任。2011年に「まち塾@まちライブラリー」を開始。以降「まちライブラリー」の提唱者として活動の運営サポートにあたる。2024年、第24回図書館サポートフォーラム賞を受賞。著書に、「マイクログ・ライブラリー図鑑」（まちライブラリー、2014）、「本で人をつなぐ、まちライブラリーのつくりかた」（学芸出版社、2015）、「ブックフェスタ 本の磁力で地域を変える」（共著、まちライブラリー、2021）、「まちライブラリー」の研究「個」が主役になれる社会的資本づくり」（みすず書房、2024）などがある。

里形 玲子（さとがたいいこ）

常務理事

1965年東京都生まれ。森ビル文化事業部所属時に磯井代表と出会う。2011年の「まち塾@まちライブラリー」立ち上がり時代より、事務的なサポートとして参画。2021年から北海道と東京の2拠点での活動開始。千歳市を中心にした北海道と、本部総務を担当している。株式会社ラゴム代表として、「コミュニティ」に関するアドミニストレーション、大学の社会人教育の企画運営業務もこなしている。

川原 紗英子（かわはら さえこ）

事務局/主任研究員

1979年千葉県生まれ。新規のまちライブラリー登

録・まちライブラリーゼミを担当。全国のまちライブラリー運営者の活動実践に触れながら、個人の力が集積するまちライブラリーの社会的役割について研究。個人の活動としては、京都を拠点に移動型のまちライブラリー「まちライブラリー@もう一つの椅子」を開き、本ピクニックや編み物をしながらおすすめ本を紹介し合う「編み物哲学クラブ」などのイベントを開催している。

小野 千佐子（おの ちさこ）

関西統括

1967年和歌山県生まれ。2012年磯井代表と出会い、「まちライブラリー」の仕組みに共感。夫と運営するシャツと雑貨のギャラリーで「まちライブラリー@フアレ*ティア」をスタート。2015年「まちライブラリー@もりのみやキューズモール」のスタッフとして関わり、現在関西エリアの運営・まちライブラリーをやってみたい人のサポートを担当。

藤井 由紀代（ふじい ゆきよ）

東京統括

1975年福島県生まれ。「まちライブラリー@MUGG PARK」の立ち上げを機に、まちライブラリーの活動に関わる。他にはブランドコンサルタント・クリエイティブディレクターとして、企業や商品のブランディング支援に従事している。

木村 和弘（きむら かずひろ）

シニアマネージャー

1968年大阪府生まれ。生まれ育った「大阪市生野区」のまち歩き案内人。証券マン、書店員、出版社などを経て「まち歩き」を始め、イベント企画と地域の人々とのコミュニケーション

ションが好きでまちづくり支援の世界に入る。大阪市の市民活動支援事業を請け負いながら、2025年10月から縁あって「まちライブラリー」に参画。十三を担当。

増淵 直子（ますぶち なおこ）

まちライブラリー@南町田グランベリーパークスタッフ

1959年東京都生まれ。町田・相模原エリアの生活情報を届けるフリーペーパーの編集担当として、25年勤務。定年退職後、2019年「まちライブラリー@南町田グランベリーパーク」のオープンニングスタッフとなり、現在に至る。本が好き、人が好き、利用者さんと話す＆聞くことが大好き。「今月のとっておき本」「常連さんの横顔（インタビュー記事）コーナー」担当。

依岡 琴乃（よおか この）

まちライブラリー@ちとせ 若女将

1996年北海道生まれ。2024年に「まちライブラリー@ちとせ」の運営にアルバイトとして携わる。働く中で「まちライブラリー」の仕組みや理念に強く共感し、2025年4月より現職に。

稲田 奈緒美（いなだ なおみ）

まちライブラリー@ちとせメディア対応/ライター

1973年北海道生まれ。フリーライターとしての活動を経て、2019年「まちライブラリー@千歳タワシプラザ」のスタッフとして加入。2022年より「まちライブラリー@ちとせ」で日々の業務やイベント運営に携わる。

編著者紹介

磯井 純充 (いそい よしみつ)

1958年大阪市生まれ。中央大学文学部哲学科卒。大阪府立大学大学院経済学研究科博士後期課程修了。経済学博士。

1981年、森ビル株式会社に入社し「アーク都市塾」「六本木アカデミーヒルズ」などの文化・教育事業に従事。取締役広報室長などを歴任。

2011年に「まち塾@まちライブラリー」を開始。以降、「まちライブラリー」の提唱者として活動の運営・サポートを推進。

著書に、『マイクロ・ライブラリー図鑑』（まちライブラリー、2014）、『本で人をつなぐ まちライブラリーのつくりかた』（学芸出版社、2015）、『「まちライブラリー」の研究 「個」が主役になれる社会的資本づくり』（みすず書房、2024）などがある。

行きたい！会いたい！ まちライブラリー

—全国47の人と本と街—

2026年6月25日 第1刷発行

編著者／磯井純充

著者／まちライブラリー応援隊

発行者／山下浩

発行／日外アソシエーツ株式会社

〒140-0013 東京都品川区南大井 6-16-16 鈴木ビル大森アネックス

電話 (03) 3763-5241 (代表) FAX(03) 3764-0845

URL <https://www.nichigai.co.jp/>

ブックデザイン／Q.design

イラスト／織戸ゆみこ

印刷・製本／シナノ印刷株式会社

©Yoshimitsu ISOI 2026

不許複製・禁無断転載

<落丁・乱丁本はお取り替えいたします> (b7 ナチュラル使用)

ISBN978-4-8169-3103-1 Printed in Japan,2026